

近代オランダにおける労働者層の余暇活動

—組織的な取り組みに焦点をあてて—

石川 恭

保健体育講座

Free Time Activities of Working-Class in the Modern Netherlands

— Focussing on Organized Activities —

Takashi ISHIKAWA

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は、19世紀後半から20世紀前半にかけてのオランダにおける労働者層の余暇活動について記すことを目的とする。これまで我が国ではオランダ人の余暇活動について、第二次世界大戦前の状況を記した文献はほとんどない。これはこの分野が、研究領域としてはもちろん、一般的にいて関心が薄かったからである。労働に比べて自由時間や余暇活動といった内容は、ほとんどその重要性を認識されなかった。

オランダにおける自由時間や余暇活動に関する文献が稀なのに対して、イギリスやドイツでは、これらに関する当時の文献が数多くあり、研究も進んでいる。イギリスやドイツに関しては、当時の状況を容易に知ることができる（例えば、川北編 1987, 角山・他 1992, 荒井 1989, 矢野・他編 2001）。

このような状況のなか、オランダでは、近代オランダの労働者層の余暇活動を、組織的な取り組みに焦点をあてて記した文献がある。限られた文献と先行研究を用いながら報告することにした。

1. 労働者層の自由時間

まず、労働者層の自由時間について記しておこう。

19世紀後半のオランダにおいて、経営者は賃金さえ支えれば労働者に長時間労働を強いてもよいと考え、利益追求のため、ガス灯を灯して一日12時間を超える労働をさせたことも多々あった。すると労働者は、こうした過酷な労働環境に集団で抵抗するようになり、「一日8時間労働、8時間の自由時間、8時間の睡眠」を経営者に要求した。このスローガンは1892年のメイ

デーで唱えられたものである。

20世紀に入り、1911年になるとオランダでは8時間労働を採用する職場が現れた。先の運動が徐々に拡大して、1919年には1日8時間労働と土曜日の半休制が労働法で定められた。労働者の労働時間短縮に向けた運動が、世紀を越えてようやく実を結んだ。一部の者だけが、自由時間を特権のごとくもつことへの疑問と、社会構造の変革に対する希望が、労働者の間で大きな潮流となった結果である。この背景には、経済的な要因だけでなく、教育の普及による労働者の意識改革、メンタリティーの変化があった。また、上層階級も、中・下層階級が自由時間をもつことで、気分転換を図ることができ、労働の効率と生産性が向上すると考えた¹⁾。だが、オランダ全土で見れば労働時間は減少したものの、職場によっては依然として長時間労働を行っていたケースもあった。

一般的にいてオランダでは、19世紀を通して一週間に6日間働き、日曜日を休みとするのが普通であった。つまり土曜日も平日同様フルに働いていたのである。ところが日曜日は休みといっても、キリスト教という安息日であるため、宗教教義に厳格なキリスト教徒は何をしてもよいというわけではなかった。日曜日は自由な時間といえども、その活動に制限があった²⁾。そのため、今でいう休日という概念は、まだ定着していなかった。ただ、19世紀後半になって、本来の安息日を守り、日曜日を過ごす人が次第に減ったため、日曜日を自由な時間として過ごす人が増えた。特に工場労働者は、19世紀の終わりになると、日曜日を労働から解放された自由な日と考えるようになった。

20世紀になると、労働者層はこの他にも数日間の休日を獲得した事例もあった。例えば、ブラバント州で

は活版植字工が、工場主から年間五日間の休日を得た。ただ、日曜日と祝祭日以外の休日が普及したのは、第一次世界大戦後であった³⁾。

2. 労働者層の余暇活動

(1) 組織的な取り組み

労働者は自由時間をどのように使っていたのだろうか。そこで、労働者の自由時間の使い方について、どのような組織的取り組みがあったのか、教会と協会、そして企業の取り組みについて記す。

i. 教会の介入から自立した余暇活動へ

19世紀の労働者にとって、自由時間の楽しみは、バーに行って酒を飲むか、カードゲームをする程度であった。このような自由時間の使い方は19世紀の間、ほとんど変わらなかった。時には、労働者の間でギルドのような組織をつくり、自由時間を楽しむプログラムを企画したが、ほとんど普及しなかった。

しかし、19世紀の終わり頃から、労働者の自由時間の過ごし方に変化が現れた。教会や、労働者の間で創られた組合のような組織が、自由時間の過ごし方に関心を持ち始めたのである。そして労働者の自由時間の使い方について、有意義なプログラムを企画するようになった。これは自由時間そのものを楽しむというよりは、労働者がバーに行って酒を飲んだり、不健全・不道徳な過ごし方をしないようにする意図があった。そのためプログラムとして提供される合唱や劇には、健全な生活というメッセージが随所に盛り込まれていた。教会や組合側には、労働者に対する教育的な意図があったのである。

実は、19世紀以前にも、教会、特にカトリックとオランダ改革派の教会が、教徒のわずかな自由時間の過ごし方について指導をしていた。教会は自派の教徒に対して、日常生活の全てにおいて、威圧的な態度で指導した。日々の生活や振る舞い、価値観の教化を図ったのである。教会は、人々が自派の戒律や規律に背かないよう注意を払い、教義に反する生活をしないよう監督した。しかし19世紀が進むにつれ、教会にとって新たな悩みが起きた。多数派となりだした中産階級の自由な生活態度である。これをなんとか教会の教義のなかに留めなければならなかった。というのは、中産階級が教会にとってよからぬ自由時間の過ごし方、例えば、ダンス、男女の気軽な交際など、教義に反する行為を、なんの呵責もなく自由に行うようになったからである。このような中産階級に対する道徳的な引き締めを目的として、教会は自由時間の使い方に関与することになった⁴⁾。しかし教会は、上層階級に対しては、自由時間の使い方や振る舞いについて干渉しなかった。上層階級を特別な階級として認め、諦めていたのである。だが、中産階級に対しては、その多さか

らして、とても野放しにしておけなかった。後に、労働者階級に及ぼす影響を考えると、教会の権威の失墜を招きかねなかったからである。実際問題、人々の教会離れが進んでいたために、教会はその存在について危機感をもっていた。中産階級が上層階級の真似事をしだしたことで、いずれ労働者階級にもそれが波及すると考えた教会は、社会の風紀が乱れることを恐れたのである。

では、教会が提供したプログラムは、どのようなものだったのか。

教会は、一年を通して教会が行う行事に参加した子どもには、褒美としてお菓子やプレゼントを与えた。また、これに親子で参加すれば、パンの割引券を支給した。教会は、人々ができるだけ日曜日に教会へ足を運ぶよう、あの手この手を考えた。これは労働者層の宗教離れに歯止めをかけることと、労働者に対して道徳的な生活を説く目的があった。そして子どもたちが、自由時間のなかで悪い遊びを覚えないように、教会に留めて監督する意図もあった。

しかし時代が進むにつれて、教会の努力もそれほど効果が上がらなくなった。人々の余暇活動に様々な変化が起きたからである。女性がスポーツに参加しだしたことで、彼女たちのスポーツを行うときの衣服が開放的になった。移動遊園地で体感的な刺激を楽しむ人が増えた。映画が登場すると、暗い室内に男女が長い時間一緒にいるようになった（これが性的な刺激となって性交へと進んでしまうことを教会は恐れた）。ダンスは、若い男女が性的なイメージを強調しながら暗い場所で踊るようになった。自由時間の使い方が享樂的になり、キリスト教の教えの中で戒められている快楽を気軽に楽しむ風潮が広まったのである。これに対して教会は、日曜日の説教や、休日の道徳的な催しを企画することで、対処しようとした。自由時間の使い方について、子供から大人まで幅広い教育をすることで状況を変えようとしたが、実際にはそれほど効果が上がらなかった。(Leeuw 1995, pp.23-24)

このような風潮に対しては、教会だけでなく、社会一般の多くの人が、若者の規律・道徳に危機感をもっていた。そこで自由主義者や宗教派は、それぞれの理念や教義のもと、未成年者の自由時間の使い方について方策を考え始めた。こうして創られたのが、未成年者の余暇活動を指導・監督をする「青春協会」である。この協会は、様々な娯楽の指導を行った。そして若者が、将来、良き父親、良き母親となるための余暇教育も行った。(Leeuw 1995, p.24)

20世紀に入ると、人々は、休日の過ごし方について、教会で道徳的な話を聞いたり、教会の周りで世間話をするだけでなく、教会とは別の場所で過ごすようになった。それは、教会から離れた場所でも健全な過ごし方ができると考えたからである。人間が生きていく

には、宗教教育だけでなく、社会的な教育の必要性も認識し出した。それはいわゆる社会勉強であったり、社会の様々なシステムや現状の理解、労働者同士のコミュニケーションや健全な趣味の共有であったりした⁵⁾。

すると様々な団体が、労働者層の自由時間の使い方について企画を始めた。当初は、上層階級のチャリティーといった上から下への慈善事業だったが、後に、中産階級が自分たちのスタイルで自由時間を楽しむようになり、自ら様々な団体やクラブを創った。これがその後、労働者層にも波及した。労働者の間でも、自分たちで自由時間の楽しみを創り出すという態度が現れた。

ところで自由時間や余暇活動に対する上層階級の中・下層階級へのイメージや、関与・介入はどうだったのか。

もともと上層階級は、労働者階級が自由時間をもつことに否定的だった。労働者は、生活の全てにおいて、仕事を優先すべきだと考えたからである。労働者には、基本的に休息・休養の時間があれば、十分だと考えた。労働者が休息以外の自由時間をもつと、過度な飲酒や暴力事件が増えると思ったのである。労働者の労働時間減少と自由時間増加が進むなかで、上層階級の思惑は非現実的だった。上層階級は、労働者に対して、自由時間の過ごし方を指導したり、公園を提供したり、コンサートを企画するなどの余暇教育を行った。しかし労働者を文明化するとといった上層階級のパトリオティズム的な試みは、労働者層の興味・関心の違いから失敗に終わることが多かった。(Leeuw 1995, pp.20-21)

労働者は19世紀半ばになると、協会を設立して社会生活や労働に関わる様々なことを、メンバーが協力して対処する動きが現れた。始めは、同じ考えをもった同士の会で、協会といえども確立された組織といえるようなものではなかった。それでも医療保険や互助会のような制度を考案したり、休日の過ごし方についてプログラムを提供するなどの試みを行った。協会は、主に、職種別、業種別につくられたが、全く創られなかった分野もあった。(Brugmans 1958, pp.186-187)

1869年に設立されたアルンヘムの労働者協会は、労働をより人間的で楽しいものとするために、労働形態や自由時間、労働者の余暇活動、労使関係など様々な点について活動を起こした。これは、確立された協会として、組織だった行動にでた最初のものである。(Smits 1870, p.3)

その後19世紀後半をかけて、労働者は、職業別、市町村別、あるいは考えを同じにするものたちの集まりが、様々な協会を設立するようになった。協会は、労働者の労働環境、社会生活一般に関わる様々な事柄に取り組むようになった。20世紀に入って協会の組織基

盤が強固なものになると、労働者の生活から個人的な問題、さらには、その家族や地域全般のことまで協会は活動の幅を広げた。

例えば、20世紀前半のデンボスでは、協会が青少年団(Jong-Brabant)を創って、地域の若者の指導や活動の援助を行った。ここに協会の余暇活動に対する関与が見られる。青少年団に所属する者は、そのほとんどが中等教育の子どもたちであった。

では、協会が設立した青少年団は、どのような活動を行っていたのだろうか。Oudheusdenは、次のように記している。(Leeuw 1995, pp.145-160)

1911年11月11日に設立されたデンボスの青少年団は、カトリック教徒の家庭の子どもたちで構成されていた。団員は男子に限られ、女子は入団できなかった。そして男子も結婚すると退団することになっていた。協会は青少年団を通して、ローマカトリックの教えを浸透させ、敬虔なカトリック教徒の育成を目指していた⁶⁾。青少年団に属する若者は、16歳になると様々な規律が課せられ、品行方正に生活することを求められた。「道徳による力」というスローガンのもと、団歌や旗を作って、我々意識をもって行動した。青少年団の青年は、将来、自営業者や企業の管理職といった職を目指すものが多かった。団体は1921年になると、さらに宗教的要素を強め、年間を通して宗教的色彩の濃い行事や教育を数多く行った。

協会は青少年団の余暇活動についても関与した。青少年団の本部がある建物のなかにビリヤードとピアノを置いたり、週一回クラブハウスに若者を集めて講演会を開催したり、討論会を行ったりした。後には、サッカークラブ、散歩クラブ、合唱団、観劇サークルのような同好会を創った。さらに協会は、青少年の規律と健全な身体育成のために、体操クラブの設立も考えた。体操は、健康な身体と規律ある人間の育成に効果的だと思われたからである。

しかし、時にはカトリック教会に反抗的とも思われる団員の行動も見られた。協会の規則や窮屈な道徳教育が、若者になじまなかったのである。

ところで1920年代に入ったオランダでは、社会が荒んでいるという意識が人々の間にあった。そのため、同じ宗派や派閥の中、つまり縦割り社会のなかで生きていくことが安全であると考えようになった。こうしたこともあって、大人たちは自分の子どもを青少年団に入れた方がよいと思ったのである。悪い遊びを覚えたり、非行に走らずにすむと考えたのである。子どもたちは、半ば強制的に、協会の青少年団に入れられた。これには当時流行りつつあった社会主義に、若者が傾倒しないよう縛りつけておく意図もあった。

一方で、このような団体は、子供を親から切り離し、目の届かないところで思想教育をしているとの批判もあった。子どもは本来家庭で育てられるべきと考える

人もいたのである。しかし、青少年団のメンバーは、初等教育を終えた子どもであることと、この年頃からの人間的な自立を考えれば、24時間団体生活をするわけではないので、結局、支持する大人が多かった。だが子どもたちは、親の目の届かないところに逃れることができた解放感から、次第に青少年団の規律を窮屈に感じるようになった。拘束されることを嫌う年頃の若者たちは、時に青少年団の建物の外で協会の意に反する行動をとった。彼らは、協会の提供する遊びやプログラムだけでは満足できなかったのである。このような若者の行動を取り締まるのに協会は苦勞した。

設立当初、協会は青少年団の目的・目標を気高く掲げ、実践面でもその成果を上げていた。しかし、1920年代の終わりになると、協会の意図した成果が上がらなくなったばかりでなく、団体の精神や規律は崩壊し始めた。若者にとっては縦割り社会など、どうしてもよかったです。興味がないだけでなく、むしろ窮屈に感じていた。これはデンボスが自由な雰囲気のある町であったことと、若者が宗教や思想に縛られるのを嫌ったためである。

1930年代に入ると、青少年団はカトリック教徒の団体というよりも、ブラバント人としての地域意識をもった若者集団に変質した。自分たちの町を誇りに思う若者が増えると、彼らは自由な雰囲気を求めたのである。これが多数派になると、彼らはOBとの接触や会合をもちながら、ブラバントのよき風土や習慣を守ろうとした。だが1930年代の終わりにはメンバーが40人程度となり、第二次世界大戦後は消滅した。

このように19世紀後半になって設立された協会は、労働者の社会生活の改善・向上や、子どもたちの健全な育成を目的としていた。そのなかで余暇活動についても施設や遊具、プログラムなどを提供したのであった。

ii. 企業と労働者の余暇活動

労働者の余暇活動に対する関与は、教会と協会によるものだけではなかった。産業革命以降、工場の大規模化が進むなかで、企業経営者が、自社の労働者に対して、何かしらの行為や態度を表明した例も少なくなかった⁷⁾。ここでは企業と労働者の余暇活動の関係について取り上げることにする。

労働者の余暇活動については幾つか資料が存在するが、企業の取り組みについては Teeuwen の研究 (1995) がよく整理されている。そこで本段では、これを引用することで、企業と労働者の余暇活動について把握することにしたい。

20世紀初頭の状況について、Teeuwen は「理想から贅沢と善意へ、そして、族長的な世話から個人化へ」というタイトルで論文を書いている (in Leeuw 1995)。彼は、労働者の余暇活動に対する企業家の態度を四つに分けた。

第1のタイプとして、理想主義と族長主義。第2のタイプとして、実用主義と日和見主義。第3のタイプとして、心配的道德主義。第4のタイプとして、孤立主義と個人主義である。以下、これらのタイプを最もよく表している事例を紹介する。

①理想主義と族長主義タイプ

事例：酵母菌発酵会社 (Gist en Spiritusfabriek)

デルフト市 1870年創立

社長は Jacob Cornelis van Marken

社会協調主義の影響を受けた社長は、世紀転換期の進歩的な企業家といわれ、人道主義的な人間として社会から評価を得ていた。社長は自社の労働者だけでなく、社会全体の労働者の余暇活動についても、企業家は世話をすべきだと考えていた。社長の主義は、「工場は皆のため、皆は工場のため」であった。そして自社の労働者に、知的・文化的発展を目的とした余暇活動として、絵画講座、音楽講座、言語講座などを提供した。また、裁縫学校と保育所を設立し、社員の妻に対する自由時間の活用を支援した。会社のなかには、読書室や簡易プレイルームを設け、吹奏楽団などのサークルも創った。さらに、会社の外には、簡易遊園地やボーリング場といったレクリエーション施設をつくり、各種イベントを催した。社長は、会社と従業員の間を一つの家族と捉え、家族(会社)は近所(地域)への気配りや余暇活動の貢献も大切だと考えていた。

②実用主義と日和見主義タイプ

事例：電気製品製造会社 (Philips)

アイントハーヘン市 1891年創立

社長は Anton Frederik Philips

この会社は、20世紀に入ると瞬く間に大きくなり、1900年には410人であった従業員が、1910年には2040人となった。月給制の社員も1900年の10人から、1910年には140人へと増えた。従業員は、アイントハーヘンだけでなく、近郊の市町村など広範囲から通っていた。会社の大規模化に対応して、社長は、社内と社外に、レクリエーションの設備を整えたり、余暇活動プログラムを提供した。1900年には社内に合唱団と演劇サークル創った。1902年からはサーカスや展覧会などに行く日帰りツアーを企画した。社長は、基本的に、会社が個人の余暇活動に立ち入るべきではないと考えていた。そのため、社員が望めば資金を提供して、施設設立やその運営に協力したが、余暇活動サークルに従業員を勧誘するようなことはなかった。1910年代に入

ると、会社は従業員の福利厚生としてのレクリエーションだけでなく、企業イメージや宣伝効果を狙った協会の設立に乗り出した。1911年には、会社名のサッカー協会、体操協会、音楽協会を設立した。1912年には、音楽設備、映画設備、リラクゼーション設備を備えたレクリエーション施設をつくった。1921年には、ハイキングやキャンプ、小旅行などのプログラムを提供した。社長は、企業として利益を追求するために、従業員は何を求めているのか、その時々が必要とされるレクリエーションは何か、会社のイメージアップには何が有効かを見極めようとした。

③心配的道德主義タイプ

事例：炭坑会社 (De Nederlandse Staatsmijnen)

マーストリヒト市 1901年創立

社長は社会の急速な産業化に心配を抱いた企業家であった。会社は自社の従業員の社会生活について、責任を持たなければならないと考えていた。そこで従業員の余暇活動についても何らかの方策を採るべきだとした。アルコールの暴飲や、それともなう暴力事件の発生などを防ぐためである。社長は、組織のトップとして社会的責任を意識した道德主義者であるが、実は、教会から労働者の余暇活動について監督するよう要請を受けていた。また、労働者が社会主義に傾倒しないよう、企業家は従業員の余暇活動を監督する役目も負っていると考えていた。会社は従業員が乱れた余暇活動を行わないよう、図書館、音楽館、劇場、映画館などをつくった。

④孤立主義と個人主義タイプ

事例：セラミック会社 (De N.V. Koninklijke Sphinx)

マーストリヒト市 1844年創立

最も多い一般的なタイプで、原則的に会社は個人の余暇活動に関与すべきではないとする立場をとる。それは個人を尊重するという立場から、自由時間についても、その使い方は個人の自由であり任せた。つまり、会社は従業員に対して、賃金労働契約以外に責任を負う必要はないと考えた。ただ、従業員の余暇活動に対して、賃金面で援助することはあった。1900年から1904年にかけて、千人ほど収容できる宴会場をつくり、パーティーやカーニバルを行ったが、その程度の関わりにとどまった。

以上のように、Teeuwenは従業員の余暇活動に対する企業のタイプを四つに分けた。要するに、理想主義

と族長主義のタイプは、会社を一つの大きな家族と考え、親である社長は、子どもである労働者の余暇活動まで面倒を見るというのである。実用主義と日和見主義のタイプは、会社の生産性を上げるためのレクリエーションとして、従業員が望むなら、設備やプログラムを提供するというものである。心配的道德主義のタイプは、従業員が自由時間に何か悪いことをしないよう会社は監督の責務を負うと考え、道德的見地から良いとされる余暇活動に引きつけておこうとするものである。孤立主義と個人主義のタイプは、基本的に余暇活動は個人の自由であるため、会社は干渉せず個人に任せておこうとするものである。

(2) 余暇活動調査からみた傾向

労働者は、自由時間を具体的にどのように使っていたのだろうか。オランダのメディア De Telegraaf が1919年から1924年にかけて行った調査がある⁸⁾。

1920年の調査では、建設労働者の多くが自由時間を飲酒に使っていた。報告書によれば、土曜の午後、仕事が終わると、建設労働者は真っ直ぐバーに行き、酒を飲むのが一般的であった。平日は自由時間がほとんどなかったため、バーで酒に浸ることは少なかったが、土曜の午後となると、バーは常に建設労働者でいっぱいだった。(De Telegraaf 1924, p.5)

ただ、このことから建設労働者が、自由時間をいつも飲酒に使っているとみるのは早計である。1920年は建設ラッシュの年であり、このような時には、バーが建設関係の労働者で流行るのは普通だからである。景気や社会情勢、戦争などが、社会のアルコール消費量に与える影響は大きい⁹⁾。

ここで労働者とアルコールの問題について触れておこう。

Schuursmaによれば、工場の隣にあるバーでは、工場の休憩時間、労働者の帰宅時間になると、テーブルいっぱいにユネーバのグラスが並べられた。労働者たちはそれをひっかけ仕事に戻るか、帰路につく生活を繰り返していた。土曜日には、一週間分の給料を受け取る労働者の列が工場の入り口付近で見られたが、すぐ隣には一週間分の酒代のつけを払う労働者の列がバーの前にできていた。つけで酒を飲んで、週末に代金を払う労働者が多かったのである。(Schuursma 2000, p.70)

このように19世紀から20世紀の初めにかけて、労働者はしばしばアルコールに溺れた。日々の疲れと現実逃避のため、そして、他にこれといった楽しみがないことからアルコールに浸ったのである。過度のアルコール飲用は、人間の心身を弱らせたばかりでなく、道德的に問題のある行動も起こした。

過度な飲酒について道德上問題があるとする見解については、社会で一致した見方であった。ただ、当初

それが生きていく上で、障害や問題となるほどではないと考えられていた (Brugmans 1958, p.180)。

しかし労働者の度を越した飲酒、つまりアルコールの暴飲については様々な問題が起きていた。アルコールの過度な摂取は、労働者の身体を弱らせたばかりでなく、心まで荒んだ状態にしたからである。さらには、道徳的な判断力までも低下させた。そして多くの場合、その家族は不幸と貧困に陥った。アルコールは、労働者にとって不可欠な飲み物となっていたが、それ故に、アルコールの過度な飲用が引き起こす問題は後を絶たなかった。もはやアルコールの暴飲は、避けられない社会問題となっていた。労働者は、日々の労働の疲れと、そこから来る空腹をしばし忘れるために、仕事の帰り道、ついバーに寄ってしまうことが多かった。

Franssen は、19世紀のオランダにおいて、アルコールの暴飲は、確かに大きな社会問題となっていたが、それはオランダ人が、ヨーロッパのなかでもアルコールをよく飲んでいてに言及している。つまり、アルコール文化とでもいべきものがオランダの国民性にあったため、アルコール摂取の割合が高かったという。また一方で、適度なアルコール摂取は、体に良いと考えられていたために、オランダ人はよく酒を飲んだという¹⁰⁾。労働者の間では、価格が安くてアルコール濃度の高いユネーバ [オランダの代表的な酒] がよく飲まれた。しかし、アルコール度が高いゆえに、過度に飲用した場合、害は大きかった。19世紀の間、ユネーバは労働者の酒として、かなりの量、消費されていた。(Franssen 1976, p.445)

また一方で、労働者の余暇活動として人気が高かったのは映画鑑賞であった。1919年から1923年にかけて、毎年550万人が映画を見ていた。550万人中450万人は、一回75セントという安価で映画を見ていた。(De Telegraaf 1924, p.5)

映画は、一度に多くの人々へ低価格で娯楽を提供するため、大衆娯楽として人気を集めた。アムステルダム映画館は週末になると常に満席状態だった。映画鑑賞は、労働者だけでなく、中・上層階級にも新しい余暇活動として普及していた。この点で映画は、階級を問わない余暇活動となっていた。

労働者の知的発展や教養教育については、様々な組織が取り組んだものの、結局、労働者は提供されるプログラムにほとんど関心を示さなかった。公共利益協会は、労働者の知的発展のために、彼らに自由時間を有効に利用するよう促したが、成功しなかった。成人教育としての国民大学も不発に終わった。1920年から1923年の間に、国民大学の受講生は毎年減った。しかも受講生に占める労働者の割合は、1921年に26.1%、1922年に25.5%、1923年には14.7%となった。だが、労働者自身が企画したプログラムは、結構な参加者を集

めた。労働組合主催の講演会や、労働者のサークルが企画した討論会などである。その他にも労働者が企画した知的教育コースのようなプログラムは、労働者自らの興味関心を重視したので、労働者は主体的かつ積極的に参加し活気があった。余暇活動としての教養教育は、労働者自らが企画したものは成功した。(De Telegraaf 1924, p.6)

おわりに

これまで見てきたように、教会は中・下層階級に対して、自由時間をキリスト教の教義にそった過ごし方に教化しようとした。それは宗教倫理を教え込むための余暇教育であった。ところが19世紀が進むなかで、労働者層は、自ら協会をつくって余暇活動や余暇教育を行うようになった。その中には労働者たちの政治的関心や意識の発展を目的とするものもあった。20世紀に入ると企業の経営者が労働者の余暇活動に関与するケースがあったが、多くの場合、労働者の要請に応えるか、労働者個人の問題として扱った。一方で、労働者が自ら組織し企画した余暇活動プログラムなどは成功した。

ところで政府は、当時、国民の余暇活動についてほとんど関心を示さず、具体的な方策を採ることはなかった。というのは、個人の生活に干渉・介入すべきではないと考えていたからである。そのため、教会や協会、あるいは企業が、労働者の余暇活動について、それぞれ行動を起こしたのである。

注

- 1) これには、もう一つの理由があった。上層階級は、労働者階級による社会革命を恐れていたのである。労働者に自由時間を与えず仕事に縛りつけることは、いずれ自分たちの地位を危うくすることになると考えた。そこで労働運動の中心となっていた自由時間の要求を受け入れたのである。
- 2) 19世紀の間、多くのオランダ人は、日曜日になると、一日に2、3回、教会へ足を運んだ。教会で祈りを捧げた後は、家に戻って静かに過ごすのが一般的であった。日曜日に数回教会へ行くということは、一日のほとんどが宗教の内であった。日曜日はキリスト教徒にとって、宗教とともに過ごす一日といっても過言ではなかった。日曜日の楽しみといえば、教会の外で茶を飲みながら人々と世間話をする程度であった。
- 3) 工場労働者や農民にとって、1900年ごろは、まだ、まとまった自由時間の観念がなかった。ましてや連続した休暇など想像もできなかった。この時期に連続した休暇を取ることができたのは、公務員が年1週間のバカンス休暇、企業の管理者クラスが8日から10日間、一般事務職で2日から4日間であった。なかには工場労働者も年間2日程度の休日をバカンスとして取ることができたが稀であった。そのため20世紀始めには、工場労働者のほとんどがバカンスというものを知らなかった。せいぜい日曜日に日帰り行楽をす

- 程度であった。労働者層と中・上層階級では自由時間に大きな違いがあった。(Schuursma 2000, p.84)
- 20世紀に入るまで、労働者にとって自由時間と余暇活動が制限されていたのは、労働は善、余暇は悪といった考えが支配的だったからである。個人で自由時間を楽しむことは悪いことであり、何か役に立つ有益なことに使うべきだと考えられていた。そうでなければ労働で疲れた体を休めて、次の労働に備える充電の時間として考えられていた。(Manning, et. al 1993, p.53)
- 4) 19世紀になって多数派となった中産階級の妻たちは、多くが専業主婦であった。上層階級の妻たちは社交に明け暮れ、逆に、下層階級の妻たちは働いて少しでも家計を助けなければならなかった。そこで教会は、専業主婦の多い中産階級の妻たちに、良き妻、良き母親として、自由時間の過ごし方の手本を子どもたちに見せるよう指導した。19世紀を通して教会は、この指導に力を注いだ。20世紀に入ると女性が様々な面で活動的になったため、彼女たちを家に留めておくことが難しくなった。水泳やテニスなどのスポーツを行ったり、ハイキング、自転車に乗る女性が増えた。女性の余暇活動が開放的になり活発化したが、男性を中心とした当時の社会は、依然として女性を家においておこうとするムードがあった。女性の自由時間は、良き妻、良き母親として使うべきだとの考えが、なお支配的であった。(Leeuw 1995, p.26)
- 5) 1890年代には工作教室が登場し、日曜大工から縫い物まで、生活の向上に役立つ教室が人気を呼んだ。これは、それまでの自由時間の使い方を変える画期的な出来事だった。人々は、教会で退屈な話を聞くより、このような教室へと移っていった。また、自然への理解を深めるプログラムもあった。ハイキングの道中、自然観察を通して動植物に対する理解を深めながら、自然の美しさや清々しさのなかで過ごすプログラムだった。始めはコースに参加していた人々も、次第に個人単位で自然を楽しむようになった。(Franssen 1976, pp.487-488)
- 6) 1910年代のオランダは、社会の柱化が進んだ時期である。それぞれが、宗教や、信念・信条のもとに、縦割り化した組織・集団に所属していった。つまり、若者の縦割り化もこの時期に起きたのである。
- 大まかにいって、オランダの中北部はプロテスタント系、中南部はローマカトリック系、比較的大きな都市には宗教派に加えて自由主義派といった縦割り社会ができた。縦割り社会に属する人々は、所属する柱のなかで、世代を越えて共通的な価値観のもと社会生活を営むことになる。子どものうちから、柱の理念や信条に基づいた環境に置かれて生活したのである。
- 7) 例えば、19世紀後半、活版印刷業は、従業員をはじめ広く人々から基金を集め、劇や歌の会を催した。(Franssen 1976, p.473)
- 8) これは一日8時間労働が法律で定められた1919年以後にアムステルダムで行われた調査である。1919年から1924年の5年間にわたってアムステルダムに住む労働者の自由時間の使い方を調べた。
- 9) ところで、飲酒の弊害については、アルコール暴飲と社会秩序という観点から、しばしば話題にされてきた。なかでも泥酔者による軽犯罪は、社会秩序を乱すという理由から問題視された。泥酔者による軽犯罪数は、オランダ全土で、1913年に31,825件、1920年に34,311件、1922年に21,706件あった。これを見る限り、1920年以降、泥酔者の軽犯罪は減っている。その理由は1919年制定の労働法にあるとDe Telegraafはみている。8時間労働の定着が、飲酒による軽犯罪を減らしたというのである。つまりは、長時間労働が飲酒を引き起こし、軽犯罪が起る確率が高くなるというのである。(De Telegraaf 1924, p.5)
- 10) アルコールは、冠婚葬祭、誕生日、徴兵時、入学・卒業式など、年中行事のなかでいつも飲まれていた。祭りや祝い事があれば、子どももアルコールを口にした。オランダ人にとってアルコールは、日々の生活に定着していた。

引用・参考文献

- 荒井正治 1989, 『レジャーの社会経済史』 東洋経済新報社。
- Brugmans, I. J 1958, *De arbeidende klasse in Nederland in de 19e eeuw 1813-1870*, Uitgeverij Het Spectrum Utrecht/Antwerpen.
- De Telegraaf 1924, *De vrije tijd van den arbeider*, De Telegraaf.
- Franssen, J. J. M 1976, *De bossche arbeider in zijn werk en leefmilieu in de tweede helft van de negentiende eeuw*, Stichting Zuidelijk Historisch Contact Tilburg.
- 川北稔編 1987, 『「非労働時間」の生活史』 リプロポート。
- 角山栄・他 1992, 『産業革命と民衆』 河出書房新社。
- Leeuw, K. P. C. de eds. 1995, *Van ontspanning en inspanning*, Tilburg.
- Manning, A. F et.al 1993, *Nederland rond 1900*, Uitgeversmaatschappij The Reader's Digest NV, Amsterdam.
- Schuursma, Rolf 2000, *Jaren van opgang*, Uitgeverij Balans.
- Smits, H 1870, *Arbeidsloonen en levensbehoeften in de gemeente Arnhem*.
- 矢野久・他編 2001, 『ドイツ社会史』 有斐閣。

(2010年9月14日受理)